審査結果の要旨

論文提出者　モローニ・セーサル・アンドレース
（ Cesar Andres Moroni ）

論文題目　A Morphological Study on Street Facades in Shopping-Entertainment Districts of Tokyo
（和訳：東京の繁華街におけるファサードに関する形態学的研究）

この論文は、建築のデザイン要素としてのサーフェス–建築の外皮に着目し、東京の繁華街の街路を構成する建築と街路全体のデザインの特徴を解明しようとする研究である。

論文は　10 の章から構成される。
第１章では研究の概要と背景、目的、対象などを述べている。建築のサーフェスは、二次元的な現象を重視した日本の現代建築デザインを理解する上で重要な特徴であること、東京の繁華街の街路が建築の集合体として一つの公共的な商業施設的な場と化していることなどを述べた上で、本研究の目的として、1. 日本の繁華街のデザインを規定する共通性と特異性を理解する、2. 建築と都市の中間的な街路デザインの研究方法を提案すること、の二点をあげる。

第２章では、理論的な背景と分析方法を説明している。また、関連の深い都市景観や東京に都市的形態関する既往研究を紹介、本研究の位置付けを行っている。分析方法として、個別の建築のスケール、幾つかの建築が複合したスケール、街路全体のスケールの三段階で、街路面を作る建物の正面の形態分析を行ない、ダイアグラム形式で示すことなどが示される。注目する形態要素は、正面の輪郭の大きさ、形態、色彩、サインなど二次的な要素の形式などである。

第３章では、東京の歴史的展開、「盛り場」の概念、街路と地域との関係などを概観する。

第４章では、東京と比較するため、海外の大都市にある典型的な繁華街の 13 の事例をとりあげ、それぞれの形態的な特徴を分析する。分析の手順は、参考例として簡略化している。

第５章では、分析対象を選択する。選択は二つの段階で行なう。第一段階では、相互に違いの顕著な東京の繁華街 18 箇所から 27 の街路を選択し、その中から第二段階として、実際の分析調査を行なう５つの街路を選択する。選択基準は、1. 下町と山の手、2. 街路の計画性と非計画性、3. 地元商店街とブランド品店など商店特性、4. 日本的と西欧的、5. 街路幅と高さの関係の 5 項目である。

第６章では、分析対象街路のそれぞれの建物について建築単体スケールでの分析を行なっている。結果として、建物のファサードには、1. 下への方向性／上への方向性、2. 垂直的な線の並び／水平的な線の並び、3. 要素の配置が分散的／統合的、4. 表面が視覚的に非浸透的／浸透的、5. ファサードに交差する面のはり出し／ファサードに平行な面の付着、という五つの対立的な特徴が混在していることが明らかにされる。

第７章では、幾つかの建築が複合したスケールでの分析を行なう。結果として、複数のファサードが独立して見えるパターン、連続的なまとまりをつくるパターン、ファサードの形態を構成するより二次的な形態要素が独立的に散在するパターン、それらが建物を越えまとまりをつくるパターンが混在することが明らかにされる。

第 8 章では、街路全体のスケールでの分析を行なう。結果として、東京の繁華街のファサードには、二つの対照的なパターン−幾つかの合い異なる区域の併置と重層−が混成されていることが明らかにされる。

第 9 章では、4 章で見た海外の繁華街の事例分析と比較し東京のそれが他に例を見ない形態的特質を備えていることを確認するとともに、上記 3 章で行なった分析結果に共通する特徴を考察している。具体的には、ファサードの特徴として、1. 強い二次元性、2. 平面の操作によるデザイン、3. ランダムネス、4. スケールの増大と反比例する秩序化のシステムの強度、の四点を抽出する。デザインの操作として、平面の分割、重層、切りかき、交差面の付加、複数面の併存などの特徴があることを明らかにする。

第 10 章では、上記分析とまとめを踏まえ、東京の繁華街のファサードデザインの形態論的特徴として、次のような 5 点を示している。

1. ファサードと背後の建築の希薄な関係
2. 多様なスケールの混在
3. 街路を横断する方向の要素と街路の軸方向に伸びる要素の二重性
4. 不明瞭な透視図的視覚
5. 構築性の欠如
6. 奥行き方向への視覚的浸透性

以上のように、この論文は、東京の繁華街の街路を構成する建築のファサードにおいて、その立地特性の違いを越え共通するサフェースとしての形態的な特徴を明らかにし、それが海外の参考事例と比較し独自なものであることを実証した。また、建築的スケールで用いられてきた形態論的な分析手法が、より大きなスケールの公共的な場の形態的特性の把握にも利用可能であることを示した。

このように、本論文は、日本の都市的な環境に見られる形態的特性を広い文脈の中で相対化し理解することを可能とし、建築・環境デザインの手法を豊富化するための基礎的知見を示すとともに、建築デザインの特徴を理解するための分析方法の適用可能性を拡大するものとして、建築設計学の展開に寄与した。

よって本論文は博士（工学）の学位論文として合格と認められる。